

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 現代中国語の余剰否定現象の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2285">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2285</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 要旨

G11104 姚 碧玉

人間がコミュニケーションする際に、様々な情報を伝えるため、コトバが使用される。一般に、エネルギー量を消耗しないように、コトバを語彙化や文法化などの方法で、情報を最大化し、労力を最小化に工夫してきた。しかし、情報が物理的に伝達される際には、多かれ少なかれ必ず雑音(ノイズ)が含まれてしまう。したがって、情報伝達が意図された通りに遂行されるために、雑音による影響に耐えられるだけの安全策が必要となる。言語にとって、余剰性こそがその最大の安全策である。

言語の余剰現象は、根本から言うと言語形式と意味内容との mismatching を反映したものである。言語形式と意味内容は一対一の関係でなくなり、言語構造の形式が意味を表す必要性を超えてしまう。現代中国語では、否定辞の生起にも関わらず、否定の意味を表さない現象がある。本論文は、このような意味的にも機能的にも通常の否定辞の働きを示さない否定辞が形式的には存在する副詞の余剰否定現象を扱うものである。

近年、余剰現象をめぐる研究が多く見られる中、余剰否定現象をめぐる研究は、まだ個別の形式に留まるものが多い。また、副詞の余剰否定現象の代表形式が多く取り上げられているが、そのほかの形式が補足的に論じられることも多い。このような事実を受けて、本論文は、余剰否定現象を副詞に限定し、体系的な副詞の余剰否定研究を目指す。

本論文では副詞「差点」、「险些」、「几乎」、「难免」、「好不」の余剰否定を研究対象とする。副詞「差点」の分析方法を基盤に、その他の5つの副詞へと応用する研究方法を採用する。本論文の目標は、副詞の余剰否定の研究を通じて、それぞれの形式・意味・機能における特徴を明らかにし、それに基づき、副詞の全体像を説明できる方法を探求することである。

まず、序論では、本論文の基盤となる余剰否定現象の定義、研究現状を紹介し、本論文の目的、研究課題、研究方法及び本論文の構成を述べる。

第2章では、本論文の柱となる副詞「差点」を取り扱う。まず、副詞「差点」に関する先行研究の問題点を指摘する。そして、述語の持つ語彙上の意味以外に、構造と意味とのずれの原因として、場面による文脈の違いや発話者の意図

が考えられる。そのため、アンケート調査や用例テストによりその可能性への考察を行う。その結果、朱徳熙(1959)のように述語動詞の語彙レベルの意味が大きく結果事態の予測に影響していると主張する。

そして、朱徳熙(1959)の分析で説明が不可能な用例が存在することから、発話者にとっての望ましい事態に使われる VP と語彙的望ましい VP が混同していることを指摘し、新たに望ましさを定義する。この定義に基づき、朱徳熙(1959)が導き出した規則を新たに分析し直す。さらに語彙的に VP の望ましさにより、VP を三分類し、種類ごとの分析を行う。その中で、これまであまり分析されていなかった語彙的な望ましさが指定されていない VP については、新たに VP における動詞と名詞との組み合わせ、つまり、デフォルトとノンデフォルトという概念を導入し、説明を試みる。

次に、本論文の後半である第 3 章から第 6 章では、副詞「差点」の分析方法を基盤にし、副詞「险些」、「几乎」、「难免」、「好不」への応用可能性を考察する。

第 3 章では、副詞「险些」に剰余否定用法が存在することを確認する。VP の語彙的解釈を用いて考察を行う。その結果、VP が望ましくない場合、「险些没 VP」が剰余否定となる。また、VP が語彙的な望ましさに指定されない場合、語彙的デフォルト解釈を導入し、説明を行う。

第 4 章では、「几乎没 X」を対象として、その剰余否定用法を考察する。まず、「几乎没 X」では「几乎没 VP」と「几乎没 NP」に分けられる。それぞれの形式に剰余否定用法があることを確認してから、VP/NP の語彙的解釈を用いて考察を行う。そして、副詞「几乎没有 VP」が剰余否定用法は僅か確認されたが、データベースでの用例はほとんど真性否定であることを指摘し、ずれを生じる理由を述べる。

第 5 章では、副詞「难免+否定辞+X」の剰余否定表現を対象に考察を行う。「难免」は「差点」とは違い、未実現の事態の可能性についての発言であるため、剰余否定は「难免不 X」と「难免没 X」の二種類があることが確認される。そして、「难免不 X」はまた「难免不+VP」と「难免不+AP」の二種類に分かれる。

「难免不 X」は語彙的な望ましさにより、三種類が存在することが分かる。VP が望ましい場合以外に、「难免不+VP」が剰余否定となる。AP が望ましくない場合、「难免不+AP」が剰余否定となることが分かる。そして、「难免没 X」

は、語彙的な VP の望ましさの観点から検討すると、望ましい X を持つ例が存在せず、望ましくない X と望ましさが指定されない X の二種類の存在が判明できる。両者が共に余剰否定となる。

第 6 章では、副詞「好不」のデータを洗い直し、VP の語彙的解釈を用いて考察を行う。「好不 X」の 9 割が余剰否定であることを確認し、余剰否定「好不 X」の結果意味解釈には「X」の語彙の望ましさが原則として関与しないことを指摘する。

第 7 章では、本論文のまとめと今後の課題である。本論文で分析した現象を整理すると表 1 になる。

表 7-1 本論文の研究対象とその関係

			すでに起こった			まだ起きていない
否定形式①			差点没 VP	险些没 VP	几乎没 VP	难免不 VP/ AP
望ましい VP/ AP			肯定的 真性否定	肯定的 真性否定	肯定的 真性否定	否定的 真性否定
望ましくない VP/ AP			否定的 余剰否定	否定的 余剰否定	肯定的 真性否定	肯定的 余剰否定
望ま し さ が 指 定 さ れ な い VP/ AP	発話者の期待 V 語彙的なデフ ォルト解釈	デフォルト	肯定的 真性否定	肯定的 真性否定	肯定的 真性否定	(VP) 否定的 真性否定
		ノンデフ ォルト	否定的 余剰否定	-		(AP) 肯定的 余剰否定
否定形式②			-	-	几乎没 NP	难免没有 NP
望ましい NP			-	-	肯定的 真性否定	-
望ましくない NP			-	-	肯定的 真性否定	肯定的 余剰否定
望ましさが指定されない NP			-	-	肯定的 真性否定	肯定的 余剰否定